

# さかなかな

2025 冬

Vol.128



## 特集

### アースと歩んだ日々

- 水族館トピックス
- 水族館アカデミー ダーウィンの箱
- ほねほね探検隊
- ボランティア便り  
私の館内おすすめポイント
- 水族館スクールレポート
- アクアリウム・ダイアリー

SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS

名古屋港水族館



# アースと あゆんだ日々

8月3日、オスのシャチ「アース」が急死しました。  
今回の特集では、名古屋港水族館でのアースの10年間を振り返ります。

飼育展示第二課 加古 智哉

2015

12/8

雄のシャチ「アース」は2015年12月8日に、千葉県の鴨川シーワールドから名古屋港水族館へやってきました。輸送中は体が乾かないように水をかけながら、健康状態をチェックしつつ、約8時間の道のりでした。

名古屋に到着した翌日には「ステラ」「リン」の母娘と対面し、なかなか奥のプールから出ようとしないアースをステラが押して、半ば無理やり手前のプールに連れていくということもありました。合流した日からすぐに一緒に泳ぎだした姿をよく覚えています。すぐに名古屋の環境に馴染んでくれてほっとしました。

来館した当時、アースはまだ7歳。体長4.3 m、体重1.4 tと小さかったアースですが、毎年ぐんぐん成長していきました。最も成長したときには、1年間で体長は30 cm以上、体重は350 kg以上も増え、16歳で体長は6 m、体重は3.6 tにまで成長し、日本で一番大きなシャチになりました。小さかったときは尾びれや胸びれの後縁が波打っていましたが、成長とともに伸びていき、尾びれの幅は2.1 mにもなりました。体が大きくなっても体を触られるのは大好きで、全身を搔いてあげるのは重労働でした。尾びれを引っ張られる遊びもお気に入り、3トンの体を引っ張るのは大変でしたが、小さい頃と変わらないその様子に、まだまだ子供だなと感じることもありました。



アースが来館して2日後に撮影した写真。  
アースから見てステラは祖母、  
リンは年下ですが叔母にあたります。

## 日々のトレーニング

とても真面目な性格のアースは、トレーニングでもその真面目さを発揮して、様々なことに挑戦しながら協力してくれました。日々の公開トレーニングでは、豪快なジャンプをしたり、尾びれの力強い振りで水を飛ばしたりと、雄のシャチの迫力ある姿を披露してくれました。時にはお客様がずぶ濡れになることもありましたが、きっとアースの姿が眼と心に焼き付いたことと思います。また研究では、ほとんど毎日、認知能力の研究に取り組み、研究者の方からも、いつも真面目にやってくれてありがたい、と褒めてもらっていました。それ以外にも、これまで測定されたことがない、成長期の雄のシャチの糞や尿からの性ホルモンの測定も行いました。また呼気からのDNAの採取方法や検出方法の開発のための研究にも貢献しました。

これらの研究は、今後野生のシャチの保全にも活かされていきます。アースが残してくれたデータは、シャチという生き物をより深く理解するための、大切なデータです。全てアースが真摯にトレーニングに取り組んでくれたからこそ得られた宝物です。



左が8歳、右が15歳の時に撮影したものです。  
胸びれの成長がよくわかります。



約10年間、アースは名古屋港水族館にて  
多くの方に愛していただき、シャチという生き物の雄大さや  
知性の高さなどを伝えてくれました。  
また様々な研究にも協力し、貴重なデータや知見を残してくれました。

皆様の心にはどんなアースの姿が残っているでしょうか。  
水中から見る大きな体、迫力のあるジャンプ、リンと仲良く遊ぶ姿。  
それぞれの記憶の中に、さまざまなアースの姿があると思います。

アースが残してくれたものが大切に心の中に残り、  
いつかその想いが生き物たちの  
よりよい未来に繋がっていくことを願っています。

ホルモンの測定のために糞の採取をしている様子。  
これらの貴重な材料から大切なデータが得られました。



2025

8/3

2025年7月31日午後、お昼まではいつも通りトレーニングを行っていたアースが、突然トレーナーのもとへ来なくなり、餌の魚も全く食べなくなりました。翌日8月1日になっても餌を食べることはなく、医療プールに移動して、血液検査やエコー検査など、各種検査を行いました。医療プールでは、時折トレーナーに体を撫でられにくることはありましたが、餌を食べることはありませんでした。夜中つきっきりで様子を見守り、8月2日も夕方から投薬治療や検査を行いました。残念ながら8月3日未明にトレーナーや獣医が見守るなかで息を引き取りました。その後、岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科の病態解析・診断学研究室の村上麻美准教授、食品環境衛生学研究室の猪島康雄教授の協力のもと病理解剖が行われ、腸ねん転で死亡したことが判明しました。



## ハワイで行われたウミガメに関するワークショップに参加しました



ワークショップ参加者の集合写真

2025年10月10日(現地時間)にホノルルで開催されたハワイ太平洋大学が主催する「北太平洋のアカウミガメ～第5回HPUウミガメワークショップ」(以下:WS)に参加しました。このWSは名古屋港水族館が参画し、2023年から取り組んでいるアカウミガメの回遊経路調査プロジェクト「STRETCH」の進捗状況や今後の研究の進め方などを話し合うための会議が行われることに合わせて開催されました。

WSではプロジェクトメンバーが一般参加者に向けて「STRETCH」の概要やその背景の紹介、これまでの放流調査から得られた新たな知見、メンバー各自が進めている研究に関する発表が行われ、その中で私は当館のウミガメの飼育環境や繁殖のプロセスを紹介する発表を行いました。

オンラインを含めて70名ほどの参加者でしたが、国際的なメンバーで意欲的に取り組んでいる「STRETCH」プロジェクトをわかりやすく伝え、アカウミガメの保全に向けた思いを共有することができた有意義なWSとなりました。

■ 飼育展示第一課 森 昌範

## 書籍「イルカの時間」の出版記念講演会を行いました

9月中旬に「イルカの時間 イラストと科学で巡る旅」(学窓社)という書籍を出版しました。この本は名古屋港水族館全面協力のもと作られ、解説部分は医師の植草康浩氏が、漫画・イラスト部分を私、浅井が担当しました。9月28日にこの本の出版を記念して、講演会「飼育係×博士～たつぷり語るイルカの秘密～」を実施しました。共著者の植草氏には、ご自身が行っているイルカの研究活動や北館のテーマにもなっている鯨類の進化と絡め鯨類の身体について専門的な話をいただきました。一方私からは、イラストを活用した展示物やコラム作成について、またイルカたちの飼育の裏側について話しました。講演会後にはお客様から「漫画やイラストは子供や高齢者でも楽しめるから嬉しい!」といった声もいただき、とても励みになりました。

今後もみなさんの応援の声に応えられるよう、今回の経験を糧にして、イラストを活用した展示物を継続して作成したいと思います。



■ 飼育展示第二課 浅井 友梨

## ありがとう、アース メモリアル写真展

2025年8月3日に死亡したシャチのアースを偲び、令和7年10月28日(火)から令和8年1月18日(日)までメモリアル写真展を開催しています。

会場は北館2階シャチプール前ほかで、展示パネル11点を設置しています。展示では、ステラやリンと寄り添う姿、ダイナミックなスプラッシュジャンプ、そして成長とともに逞しさを増していった日々を記録写真で紹介しています。日々のエピソードや当時の様子を添え、アースの歩みをより身近に感じられる展示としました。

会場では、多くの来館者が足を止め、展示の一枚一枚を丁寧にみつめていました。展示を通じて、アースが長年にわたり多くの人々に親しまれてきたことを改めて感じる機会となりました。

アースは、その穏やかな性格と堂々とした姿で多くの人々に愛され、私たちに感動を届けてくれました。これまでアースを温かく見守ってくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。アースありがとう。



■ 飼育展示第二課 日比野 真大

## 水族館トピックス 2025 冬

## 『名古屋港で海洋ごみ清掃～ごみ清掃でみえてくること～』を開催しました

当館では初めてとなる『一般の方を募っての海洋ごみ清掃イベント』を11月15日、16名の方に参加していただき実施しました。清掃場所は水族館西側の石積み防波堤です。今回は「ヒトが作り出したごみ」を回収します。やはり回収物のほとんどは、ペットボトル、ポリ袋、食品トレーの切れはし、梱包用のPPバンドなどのプラスチック製品です。それぞれのごみ袋がみるみる膨らんでいきます。清掃後は、みなさんには水族館ならではの水族と海洋ごみについてのレクチャーを聞いてもらいました。

このイベントでは海洋ごみの現実を見てもらい自分の体を動かして回収作業を行い、海洋ごみと海で暮らす水族の関係に気づいてもらう…。つまりは考えてもらうきっかけを提供することを目的としました。

イベント後みなさんに書いていただいたアンケートの中に、『自分が関わることで関心も興味もわきますし、今後の行動にもつながる本当に良いキッカケになったと感じます』などの記述が多々あり、私たちの思いが伝わったのではないかと思います。

海洋ごみ清掃はいろいろなことを教えてください。



みなさん黙々と回収作業に集中しています



ごみ袋(30%)31袋集まりました

■ 学習交流課 吉井 誠



シャチの認知能力に迫る
飼育展示第二課 宮嶋 桃子

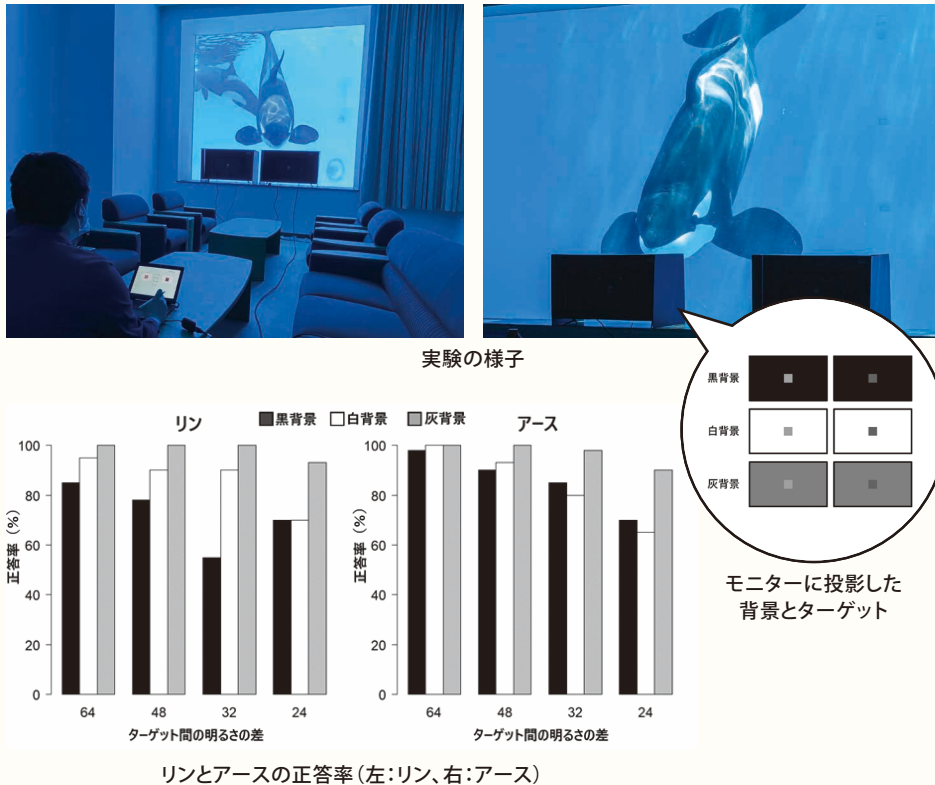
陸上とは大きく異なる水中の環境に適応してきたイルカやクジラの仲間たちは、音を使うことで様々なことを知ることができる“エコーロケーション”と呼ばれる能力を発達させてきました。一方で、野生下や飼育下での行動観察から彼らがエコーロケーションだけでなく視覚を通して得た情報も生活に役立てていることはわかっているものの、その視覚を用いた認知能力についてはまだ謎が多く残されています。

そこで名古屋港水族館では飼育鯨類の中でも希少であるシャチを対象として、2019年～2025年に渡り、京都大学ヒト行動進化研究センターの三田 歩博士とシャチの認知能力に関する共同研究を行ってきました。これまでにやってきた実験のうち、明るさ対比錯視について紹介します。

● 明るさ対比錯視

明るさ対比錯視とは、明るさの異なる2つの領域が隣り合っていると、その2つの領域の明るさの差であるコントラストが実際よりも強く感じられる、というものです。例えば、暗い背景に囲まれた灰色の模様は実際よりも明るく知覚され、逆に明るい背景に囲まれた模様は暗く知覚されるという現象です。私たちの視覚を用いた物体認識では、強調されたコントラストが物体と背景を視覚的に分離するのに役立っていると考えられており、明るさ対比錯視はチンパンジー、鳥類、魚類、昆虫などヒト以外の動物でも起こることが報告されています。では、視力が低く、色覚を持たないイルカやクジラの仲間たちにとってコントラストはどのように知覚されているのでしょうか？

この実験では水中窓の前にモニターを設置し、そのモニターに映し出された2つのターゲットの明るさを比較して、吻先でより明るい方を選択するという“明るさ弁別”の課題を行いました。その結果、シャチでも明るさ対比錯視が観察されることが示唆され、鯨類にとってコントラストが視覚を用いた物体認識の重要な手がかりのひとつになっているのではないかという結果を得ることができました。得られた結果は貴重なデータとして認知研究の分野で生かされていきます。



ほわほわ探検隊

骨は語る
飼育展示第二課 福本 洋平

こちらは、1995年にアイスランドで打ち上げられたシャチの骨格標本です。この標本には左側の肋骨に骨折し治癒したと思われる痕跡があり、怪我をしながらも生きていたことがわかります。船にぶつかったのか、仲間との闘争なのか、怪我の原因はわかりませんが、骨が語るシャチの暮らしに注目してみてください。

すり減った歯と漂着した場所から、ニシンなどの魚を主に食べていたシャチだと考えられます。

ボランティア便り
私の館内おすすめポイント

Volunteer News

南館1階 タッチタンクのイトマキヒトデ

ボランティア 瀬口 聡子

タッチタンクでは「生き物観察会」を開催中

近くで見ると細かい動きが分かります

「ハア～。ここにはりついているとやっぱり安心するなあ」

「エッサ!ホイサ!はやく隅っこに隠れたいよう」

「これは何かな?調べてみよう。フムフム・・・」

タッチタンクのイトマキヒトデを見ていると、その行動と共にこんな声も聞こえてくるようで、思わず頬が緩みます。生物にとって、より良くなった環境で、彼らはイトマキヒトデらしく、そして自分らしく!?, ゆったりイキイキと暮らしているから。その様子を、の～んびりと観察してみませんか?

水族館スクールレポート
School Report

動物学教育賞受賞記念講演会を開催しました
飼育展示第二課 神田 幸司

シネマ館の大スクリーンでシャチの話をたくさん聞くことができました

10月26日(日)、名古屋港水族館南館2階シネマ館で、日本動物学会動物学教育賞の受賞を記念した講演会を開催し、187名の方にご参加いただきました。冒頭では栗田館長より、今回の受賞の対象となった当館のこれまでの多様な教育普及活動について紹介がありました。

続いて、京都大学野生動物研究センターの三谷曜子教授をお招きし、「シャチとヒトが調和する海を未来へ」と題した特別講演を行っていただきました。講演では、かつて捕鯨によってシャチが捕獲されていた時代の話から、近年の研究で明らかになってきたシャチの生態、さらに現在北海道で起きているシャチと漁業の競合の問題まで、幅広い内容が取り上げられました。シャチとヒトとの関わりを軸に据えつつ、今後どのように野生動物と共存の道を探っていくべきかを考えるきっかけにしたいという、三谷教授の思いのこもった講演でした。

参加者のみなさまが熱心に耳を傾けている様子が印象的で、三谷教授のメッセージはしっかりと伝わっていると感じられました。講演後には、「知らないことが多く驚いた」といった声も寄せられ、動物学教育賞受賞を記念するにふさわしい、意義深い特別講演となりました。

三谷教授は国内の野生のシャチ研究の第一人者です。



# アクアリウム・ダイアリー

2025年9月～2025年11月

## 催し物

9月20日～10月31日	ハロウィンアクアリウム2025 「ナンヨウツバメウオの幼魚」展示	【水族館スクール“もっと知りたい!ダーウィン教室”】 10月19日 「ウミガメの命をつなぐ」	参加者5組15名
10月28日～1月18日 11月15日	アースメモリアル写真展「ありがとうアース」 「名古屋港で海洋ごみ清掃 ～ごみ清掃でみえてくること～」開催	11月16日 「大接近!ペルーガ飼育の舞台裏」	参加者5組14名
11月22日～	アクアクリスマス2025 ネオンテトラなど展示		

## 生物の出来事

11月19日 愛知県立三谷水産高校実習船「愛知丸」にてアカウミガメ(2～5歳齢 6頭) 潮岬沖から標識放流

## 来訪者

9月26日 11月 4日	美ら海水族館 古網雅也 課長補佐 他2名 パリ水族館 クラゲキュレーター Etienne Bourgouin 氏 モンペリエ大学 准教授 Delphine Bonnet 博士 シーライフ名古屋 小川泰史 館長	11月11日 11月14日 11月27日	金沢大学 教授 鈴木信雄 博士 他3名 スタンフォード大学 Larry Crowder 博士 (一財)石川県民ふれあい公社 理事長 山口健介 氏 他2名
-----------------	---	----------------------------	---

## 講演・その他出来事

### 【講演など】

9月 3日～ 4日	中部ブロック獣医師研究会(参加:小谷由佳子)	11月 6日～ 7日	JAZA中部ブロック事務主任者会議 開催
9月 4日～ 6日	日本動物学会(講演:栗田正徳、勝見乃里江)	11月 8日	生物多様性センターまつり(出展:小林清重、宮嶋桃子、大杉奏人)
9月12日	第2回イルカ人工授精シンポジウム in 東広島 (参加:栗田正徳、神尾高志)	11月13日～14日	JAAトレーニングセミナー (参加:横田匠ほか)
9月13日～14日	愛・地球博20周年記念事業「スナメリレクチャー」 (講師:加古智哉、福本洋平)	11月18日	瑞浪市立瑞浪南中学校講演 (講師:大島由貴)
9月25日～26日	国際シンポジウム 「アニマルウェルフェアサイエンスとその応用」 (参加:加古智哉)	11月20日	JAA理事会 (参加:栗田正徳)
9月26日～28日	野生動物医学会 (参加:小谷由佳子)	11月20日～22日	JAZA海獣技術者研究会 (発表:神田幸司、参加:材津陽介)
9月28日	「イルカの時間」出版記念講演会 (講演:植草康浩先生、浅井友梨)	11月27日～28日	JAZA動物園水族館技術者研修会(発表:荒武朝子)
9月29日	「飼育係×博士～たっぷり語るイルカの秘密～」 JAAトレーニングトーク (オンライン参加:森朋子、福本洋平)	11月28日	第20回スナメリ研究報告会 (参加:森朋子、加古智哉)
9月30日	JAZA理事会 (参加:栗田正徳)	【その他】	
10月 4日～ 5日	宮崎大学農学部集中講義「水族館学」(講師:森昌範)	10月 3日	田原市立高松小学校「ウミガメ放流会」
10月 6日～ 7日	第2回クラゲ飼育ワークショップ (参加:坂岡賢)	11月14日	STRECHラリー博士 講演会
10月 6日	JAZA中部ブロック園館長会議 (参加:栗田正徳)	11月17日～18日	アニマルウェルフェア監査対応(神田幸司)
10月10日	北太平洋のアカウミガメ ～第5回HPUウミガメワークショップ～(参加:栗田正徳、森昌範)	【講師派遣】	
10月14日	JAZA高病原性鳥インフルエンザ実地講習(参加:小谷由佳子)	9月17日	あま市立美和東小学校(市川隼平)
10月26日	日本動物学会動物学教育賞受賞記念講演会 京都大学野生研 三谷教授講演会 「シャチとヒトが調和する海を未来へ」	11月22日	エコパルなごやコラボワークショップ(市川隼平)
		11月30日	海とアートのワークショップ(加藤浩司)
		【職場訪問・レクチャー(オンライン含む)】	
			48件 3,169名
		【職場体験】	
			4件 15名

## 編集後記

名古屋港水族館では、約500種50,000匹もの生物を飼育しており、残念ながら毎日必ず死んでしまう個体があります。ご質問の多い「死んだ生き物の扱い」についてですが、必ず解剖や病理検査を行い、死因を徹底的に究明します。その結果は職員間で共有されるのはもちろん、希少な症例などは他の水族館などへの参考として研究会などで広く公表します。生物の死を今後の飼育に活かすこと。これこそが、私たち飼育員に課せられた重要な使命なのです。(春日井)

### 表紙写真 アースとの思い出

写真展の開催にあたり、どの写真を採用しようかと過去の写真を掘り起こしました。あんなことあったな、こんなこともあったなと選びながら涙が止まりませんでした。アースとの日々すべてがかけがえのない思い出です。(宮嶋)

ニュースレター さかなかな Vol.128 2025年 冬  
発行/公益財団法人 名古屋みなと振興財団 名古屋港水族館  
〒455-0033 名古屋港区港町1番3号 TEL.052-654-7080  
URL <https://nagoyaaqua.jp>  
本誌の掲載記事、写真等の無断複写・複製転載を禁じます。

WEBサイト  
<https://nagoyaaqua.jp>  
(なお、一部の機種でご覧いただけない場合があります)

